

小田原史談

第11号 談会史目録
小田原一館
市原市文
所田士
発行所 小郷

現代 小田原大秘録 (八)

石井富之助

これはさておき、ここに相心流捕手の達人、富田吉右衛門という者があり、桃源寺という寺に奉公しているのを、広仲が見つけ出して召し抱えられた。

そもそもこれは尾州の御家中、岡本浜右衛門の門人で、あっぱれ上手の聞こえある人であったが、傍輩と口論の末これを討って小田原に来、桃源寺の和尚を頼み、紙細工をしていた。

広仲はそのころ和尚と仲が良く時々遊びに来たが、天狗返しという捕方の話でこれは自分にも出来ないということを言った。宮田はこれを見てわたくしが行なうて見ようという、その捕

方で広仲を投げとばした。広仲はその技に感じて推拳したので、御先手足軽に召抱えられることになったわけである。

その頃お屋形の御普請があり、その勤めにまわされたが、吉右衛門が庭にいる時、屋根方の者一人が、踏んだ瓦とともに倒れ、手をひらいて支えようとした

この頃、無敵流剣術士神谷与衛門も最早老家に及ん

だが、まだ剣術において続く者がなかった。ここに北田道衛門という強勇の人かいて、杉山の高弟で山井流剣術の達人として知られ、稽古所に並ぶ者がなかった

神谷と懇意な仲であったが、ある時北田は「貴殿は無敵流剣術においては名人

やっしと打ち込んだ。その時神谷身をひらいてはずしたが、松の一寸板敷がみじんになってくれた。神谷は太刀を納め「さては御名人かな」と賞めると、北田もまた「貴殿がおはずし

の時から、後の太刀が出ないはずがないのに、それを打たないで太刀を納めたのは五分にして意趣遺恨をのこさず、あっぱれ神谷は上手と知られた。これはそのむかし、由井正雪が丸橋忠弥と始めて試合をした時、正雪も大事を抱える身なので、丸橋を味方にしようとして立合を五分に引きわけたことがあるが、神谷もまた主君を持ち、大事な身なので思慮して行ったことと考えられる。

「わたしも一生懸命ではなかった。後、後の太刀が出なかつた。貴殿の上段はまことに大したものだ」

無題

古屋安定

私は若い頃、よくこんなことを経験して、ひとり煩笑ましく思ったことを思い出す。

大論文か、私の頭の中でしゅん動していたりするの

内面的な私は、いつも同じようなことを、砂の上で書いては消し、書いては消しているように、本当に同じようなことを、くり返し、くり返し、いろいろ

こうしたことが繰返されている間に、若い私は、とるに足らぬこの私が、世界中の一枚の存在として意識されたり、私の中で地球がぐるぐる廻っていることを感じたりしたものである。

な想念が、頭の中を去来して、いずれも修練の太刀筋さわかやか、北田すきを見て上段にかまえる

これは哲学的に云うと、大變むづかしい理論が出て来るようだが、私は只今実感として、そう感じたのである。

二宮尊徳の研究を始めた時も、私は、彼がこうしたとか、ああしたとか、彼の哲学はこうであったとか、どんなに素晴らしい経世家であったとか、彼に関する知識を集積する興味も少なく又性来の魯鈍のせい、か、そうしたこと着積して、とうとうと教えを垂れることなど、夢にも及ぶがたいものであった。ただ私には、彼が現実の人間でないだけに、圧倒される心配もなく末梢神経を徒らに突らされずにも済んで、心安く、彼の腹の中を、ひっかき廻すことが出来る楽しみを味わって来たのである。そんなことは初歩の人間のすること

とで、尊徳全集三十六巻に結果集するところの、彼の経世家としての教えを修得しなれば駄目だと叱られるのだが、私には矢張り彼の「大経世家である」「人間」と交通する道を開くことに興味があり、そうして彼のなま暖かい肉体を身近かに感ずることに生きがいを抱いて来たのである。

これも気の弱い私の、私に与えられた秘めやかな陸言なのかも知れない。マリー・ローランサンが、肖像画

を描いている時は、モデルであるその人の心の世界を旅行している心境だと云ったことに、私はいたく共鳴を感じたことを覚えてい

この頃、郷土史の資料や出品を見せて貰う時、この方面に素養のない、私の頭に浮んで来るのは、ちょうど木片を綴り合せて作られたピノチオのように、あの一片の土器から、何とかして、私語が訊きとられたら

どんなに楽しみだろうと思ふのである。いろいろ科学的な研究方法もあるのだろうが、私はその土器の破片を通して、紀元一九六二年と紀元一年が、私の足下に重なり合っていることを考へることさえ、何だか自分が青年になつたような気が

笠を御取り下さい

郷土文化館内 K

江戸時代の旅姿に百パーセント魅力をもたせるものは、何んといつても時代の笠であろう。

夜が冷い 心が寒い 渡り鳥かよ 俺等の旅は 風のまにまに

して来るのである。若し又紀元一年の〇月〇日〇時私の立っている氏の処、勿論形も様子も変つてゐるだろうが、〇分の状態を画面に活躍させ、その中に自分も二重写しになつてゐるその画面を、一九六二年の七月三日の午後一〇時に、この私が眺めることが出来るとしたら、それは又何と素晴らしいことであろう。

これは勿論誇張した表現であるが、蒐集マニアや専門家の解説が、全くの素人の私達にせめて空想或は連想の羽を伸ばさせてもらえたら、それは単なる懐古趣味でなく、それこそ意義ある文化財としての価値を發揮して貰えたと云うべきではなからうか。

吹きさらし 右手に笠をかかけ、左手でオランダラシャのマントをちょいと肩に引掛けたあの旅姿、かつて歌謡曲に、映画に、劇踊にヒットを放つたのは皆笠のおかげであ

って、若し笠を取り除いたらどうか。恐らく香の抜けた酒のようなもので、それだけに其の場における重要な位置を示すものである。然かも架空的なものではなく昔から実在し色々な種類があつて、身分の上下と使用目的によつて夫々使いわけたものである。封建時代の人々はこの笠によつて職業の上からは勿論、恋愛仁義に至るまで皆恩恵を蒙つたことであろう。「笠」とい

親の心子知らず、とでもいうべきか、長い間の田沼意次時代の奢侈に慣れた人々の中には、寧ろ憂國の志の心を知らず 白河の清き流れに 魚住ます ほとこの田沼の濁ごり せいしき

えは郷土小田原にとつて忘れてならぬことは、松平定信が根府川の関所を通つた時のことである。時は江戸末期に近い頃、世を挙げて天下泰平の酔夢がながく続

いておつた時も、日本国土の北から南から魔手の手が伸びるが如く異國の船の脅威に侵されはじめた。天明七年(一七八七)松平定信老中筆頭となるや治世に力をいたし、奢侈を禁じ日夜文武を励ましたことは余りにも有名で、當時を風刺した狂歌に

世の中にか(蚊)ほどうるさきものはなし ぶんぶ(文武)といひ 夜も寝られず によつてもうかがわれる

を交して通つて行った。今回はからずも市内十字町の某収集家の手によつてその情景を物語る掛図が発見されたのを御厚意により郷土文化館の階上、歴史考古室へ展示することになつた。それは階上にこれに最も関係のある次の資料が展示されてあるからである。

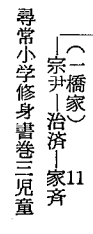
- (1) 江戸末期に於ける小田原城下町地図上に明記された三ヶ所の砲台
- (2) 砲台の構図
- (3) 当時小田原藩が私費を投じて築造せし砲台の台座
- (4) 江戸城を中心に房総豆相に渉る沿岸砲台配置地

この掛図の前に立てば、従来のこれらの見方は更に新味を加え、温故の念一入増まし、小田原藩が如何に海防に意を尽くされたかがうかがわれて、恰も目前にパノラマを夢みる感がするようになつた。

定信は徳川八代目の将軍吉宗の孫にあたり、奥州白川の城主、十一万石の大名であつた。老中筆頭に任ぜられし時は既に大老なく、従つて幕府に於ては將軍の次に列する重職であつて、

所謂飛ぶ鳥を落す程の権勢があつた。これだけの大人物に対し、小田原城主大久保忠頼の命を守り、職務に忠実であつた関守が遂に定信をして法に従わせしこと一方関守のことは素直に受け入れたことは、美挙といふべきか、英断といふべきか語るすべもない程である。

明治から大正に涉つて文部省発行の国定教科書小学児童用の修身書に「規則を守れ」と題して出ていたので、大方は懐しく思ひ出されることであろう。星霜ここに百七十年、夢の超特急が荒れ果てた根府川の関をよそに南郷トンネルによつて一瞬のうちに熱海方面に姿を消す世となつても、天守閣より西方遙かに浜辺を見渡せば、定信の足下に打ち寄せた白波と思へて、そぞろに昔が偲ばれる。



用(写し)

第十八 きそくをまもれ
松平定信は、ばくふのお
い役人でありました。或年
地方に見まわりに出かけた
時、或閨所を通りました。

定信は何の気なしに、かさ
をかぶったまま通り抜けよ
うとしました。すると閨所
の役人の一人が「閨所のき
そくですから、かさをとお
り下さい」といってちゅう
いしました。定信はそれを

聞いて「なるほどそうだっ
た」といってすぐにかさを
とって通りました。

其の日、やどに潜りてか
ら、その土地の上役に「け
ふ、かさをかぶったまま閨
所を通らうとしたのは、ま
ことに自分のふところへで
あった。それを注意してく
れた役人に厚くおれいを伝
へてもらいたい」と、いっ
て、ていねいにあいさつし
ました。

秀吉を羨む

万華華美好みの秀吉が、
小田原戦役の時、懸々その
真骨頂を發揮して、石垣山
を中心に連日連夜舞へや歌
への歡樂境をかもし出した
諸將には国元から女房を呼
び寄せたり、自分も淀君を
連れて来て籠を示している
連戦連決が専売かと思っ
た秀吉が、今度は長期戦だ
と呼称してみせた。是が又
実は連戦連決の変形的な一
つの戦略かも知れなかった
のではあるが、その秀吉が
家康と二人で石垣山上から
小田原城を見下しながら立
小便をした話は関東古戦録
が記している。

先日、自分は会友ととも
にこの石垣山上を訪れたが
どうもあの高い所から下を
うち眺める気持と云うもの
は誠に妙なもので、あの辺
があの建物だとすると、我
が住家は何処だろうと探し
ても、とても小さくて見え
ず、それどころか下界でう
ごめいている人間共が、い
やその中でうす巻くありと
あらゆる葛闘が、実にばか
げている情なくなってしまう
たのである。

▼すでに矢が放たれた以上
あとをつづけねばならぬ。
それがへろへろ矢でも、男
の意地として引込むわけに
にゆくまい。世には三号雜
誌というのがあるが、その
三号も危ぶまれていた史談
誌が継続されてすでに十一
号を發刊するにいたった。

無駄我記

蓑田天峰

▼編集者の労を多とし、史談
会員は感謝すべきである。
▼編集のむずかしさは、十
年来の経験のある私もよく
知っている。世人の想像す
るような簡易なものではな
い。編集と取り組んでいる
事務局某氏は本職の傍らの
仕事であるが、相当あたま
をなやまして居られること
であろう。それにも拘わら
ず、まだ出来ぬかなどと矢
の催促は酷すぎる。会員は
共同の精神で協力すべきで
はあるまいか。

▼卒直に言って、わが史談
会に中心人物の無いのを私
は常に遺憾に思っている。
中心人物とは、中心となっ
て会を指導し、卒先して会
務に当り、編集のことから
会員募集のことまで自身裸
となって働く人をいうので
ある。名利を捨て、犠牲と
なって趣味に生くる底の人
が、あって、会の發展は期し
得られるのである。現にか
かる熱心家のある史談会は
相当の成績をあげている。
▼史談会は今日以上發展す
る可能性がありながら、遅
々として進まぬのは熱の力
が足りないからかと思ふ。

▼私の持論とせる小田原の
史実を集めて、せめて年一
回でもよい単行本として発
行してもらいたい。後世に
残すべき史談会の仕事とし
て極めて意義あるこのこと
を等閑にして、月刊の史談
誌に満足しておるべきでな
い。或は言う、月々の誌面
から集録して、相当の時機
に出版すべきである。一
応之尤もではあるが、今日
の誌面より抄録して後世に
残すべき記事が果して何程
あるか。

▼このご意見は誌面を豊富

杉景勝、前田利家を、しか
も尙遠州方面の海上は長曾
我部元親、加藤嘉明、九鬼
嘉隆の海軍といったように
総数十四万八千の攻囲軍を
従へて、号令一下小田原城
の秀吉が石垣山上で立小便
をしていてののである。

遠慮して少し離れたとこ
ろでボンジャボンジャやっ
てる家康を見もせず、下に見
える小田原の城と、青天井
を七分三分にらみながら
「北条を亡したら貴公に關
八州を上げるよ」としづく
試みたいものである。
(小田原昔波奈し)より

玉伝寺の位置

十字町二丁目三百十三番
地に玉伝寺がある。
此の寺は元、早川の海岸
に近い所であったが、大津
波のため付近一帯の家屋と
共にこの水難にやられてし
まった。当時稲葉城主は玉
伝寺のために書を送って現

在の地を与え、ここに再建
せしめたのである。当時拝
領せる書は今尙御墨付とし
て鄭重に保存されているが
、近く小田原市郷土文化館
に出品し、公開することに
なっている。
(住職談話)

にし貴重なる記事をまづてはじめて言えることで、蓋しに其大の経費を念慮に當り斯道の權威者中野敬次郎氏を頼りて北条五代の史蹟及び北条以前の小田原を史実家の立木望隆氏へ、その他それぞれの方へお願ひして、もっと權威ある会

視聴覚教育の先駆者

井上久松翁を偲ぶ

明治初年いち早く外国の文明を取り入れて国内の文化に貢献した人や時代の波に乗って營利に巨万の富を得た人々は相当あったことであろう。生存中に功を成し、名を擧げて一角の明星群に入り歳月と共に消え失せし例も少なくない。これに反し只黙々としてこの文明の器具に全生命をかけて地方の教育のために一生を捧げた久松翁の如きは、今や知る人ぞ知るでわが県西に於ける視聴覚の先駆者たる大先生である。

誌にしてもらいたい。それなしに莫大の経費を念慮に費しては、折角の単行本の発行も覚束ないのではないかと思われるのである。
▲老人はとかく口うるさい余計なことまで心配する。考人の繰り言としてご覧を得ば幸甚である。

直す好機は今なりと決意のほどを固め、目的に適う一翼にもなればと、弟夫婦にこの旨を告げた。然し乍ら翁は一小学校教員の身で、その上奇偶し何等財産あるわけもなく先き立つ金銭に相当苦慮した。この苦しみに表面に出ては却って弟夫婦に迷惑であることを憂え日夜を日につんだ忍んでの努力は遂に念願の幼燈機を求むるに至った。

愛国心とマッチして拳闘一致、義勇奉公の精神をいやが上に燃やした。然るに戦後、人心やゆるんで兎角華を好み美に離れる風潮ありて、やもすると風紀みだるることあり、を如実に見聞し、自ら創意と工夫をこらした。自作のスライドに慨嘆切々の思を通して大衆に呼び掛ける等よく社会教化面につくした。翁の晩年の頃は幻燈は相当流行したが、県西各方面から懇願される人は殆んど翁に限ったものであるとまでいわれている。

愛国心とマッチして拳闘一致、義勇奉公の精神をいやが上に燃やした。然るに戦後、人心やゆるんで兎角華を好み美に離れる風潮ありて、やもすると風紀みだるることあり、を如実に見聞し、自ら創意と工夫をこらした。自作のスライドに慨嘆切々の思を通して大衆に呼び掛ける等よく社会教化面につくした。翁の晩年の頃は幻燈は相当流行したが、県西各方面から懇願される人は殆んど翁に限ったものであるとまでいわれている。

こけらおとし

副会長 井上英一

本年七月二十八日に市民会館の落成式が挙行されたが、新聞紙上や市報で皆様も御承知の事と存じます。

落成式に祝うのを「こけらおとし」(楠)落しと書きます。然し「楠落し」と書いてあるのを時折見掛けますが、これは誤りです。

それから「こけらおとし」は新築又は改築した劇場が完成して初開場することではあります。語源は明らかではありませんが建築の屋根に楠葺をする事です(古くは瓦を用いない時代もあった)その楠葺もすんで雑多な楠(木片)を屋根や足場から払い落すそれで楠落しが完成を意味するものになったのであります。

さて二十八日の当日はカブキにより祝って頂く事も決定されました。然し謡曲の最高家元による「翁」でも願へたらと思はれたのでしたが色々の

して表彰されている。尚、翁の使用せるそれら大半は郷土文化館に近く展示されるとの由、そのおりに一層翁を偲び感銘を深くすることであろう。

清水 耕造

昭和三十七年六月十五日発行
会費 (毎月一回発行)
一ヶ月三百六十円
発行人 小田原史談会
編集人 機関紙発行委員会
発行所 小田原市幸一丁目
郷土文化館内
小田原史談会

第十一号